東大寺法華堂前石燈籠実測記

狭　川　真　一

はじめに

東大寺法華堂（三月堂）の正面に１基の石燈籠が立っている。きわめて著名なもので、建長六年（1254）銘を持つ伊行末の作品として知られている。この石燈籠について、平成29年（2017）に滋賀県多賀町の胡宮神社境内に残る石燈籠の基礎を報告するにあたり、参考事例として詳細に調査をさせていただく機会を得た。この折に作成した実測図は上記で活用後、筆者の図面ケース内で保管されるだけとなっていたが、その後、現地調査での漏れについて補足を行い若干の所見を得たことから、作成した実測図を公開して活用していただけたらと考えた。幸いにも東大寺様のご了承を得たので、ここに報告する。

当該石燈籠はきわめて著名なものだけに、先行する報告も多々存在するが、ほとんどが資料の紹介に留まっている。目に留まったものを列記すると、早くに天沼俊一が奈良県の史蹟勝地調査会で調査を行い、報告時に実測図を掲載している（天沼1913）。その後、天沼の著書で「最もいい形である」と称し、実測時の高さと径の比率を提示している（天沼1933）。その後、石造美術研究が盛んになってからは必ずと言ってよいくらいに著作物には登場し、川勝政太郎は自身の著書の多くにこの石燈籠を掲載し（川勝1939、1978など）、清水俊明（清水1984）や山川均（山川2006）は、この石燈籠の解説に加えて銘文から造営の背景を読み解こうとする姿勢が見えている。またこの石燈籠が以後に製作される石燈籠の規範となっているとの指摘も多くみられる。

このように多くの研究者が言及する資料であり、屋上屋を重ねる部分も多々あることは承知の上で、実測図の公表と共にここに簡単な検討を加えたいと思う。

写真１　東大寺法華堂前石燈籠全景（南から）

１．石燈籠の概要

花崗岩製で基礎から宝珠まで完存しており、総高（基礎蓮弁下辺から宝珠上部まで）240.4cmを測る。ただし、使用する花崗岩には２～３種のものが混じっている（後述）。

なお燈籠は6石で構成され、以下各部位別に報告する。ただし、解体したわけではないので各部の接合方法は未確認である。

基礎　地下に大半を埋め込むタイプで、礎石風の基盤部分は平面形が北側がやや飛び出す四角形を呈し、南北93.5cm、東西87.0cm（最大値）を測る。現状で地上に15cmほど顔を出しているだけで、

地下にどの程度が埋もれているかは不明。この石材の上面を平坦に加工しつつ、竿を受ける反花座を作り出している。反花座は直径74.0cmを測る単弁八弁の蓮華文で、各弁の間には間弁が彫り出されている。弁の基部は溝状に窪んでおり、その内側が竿の受部となる。受部は2段で上段上面の直径は40.8cmを測る。

竿　円柱形で上下と中央に節を持つもので、長さ106.1cm、最大径（中央節）34.8cmを測る。竿部はエンタシス風に中央がわずかに膨らむように作られており、下半部では上端径31.8cm、下端径33.6cmに対して竿下半中程の最大径34.0cmとなる。中央の節は3段につくられ、節の中間は太く幅が5.7cm、上幅2.6cm、下幅2.9cmである。

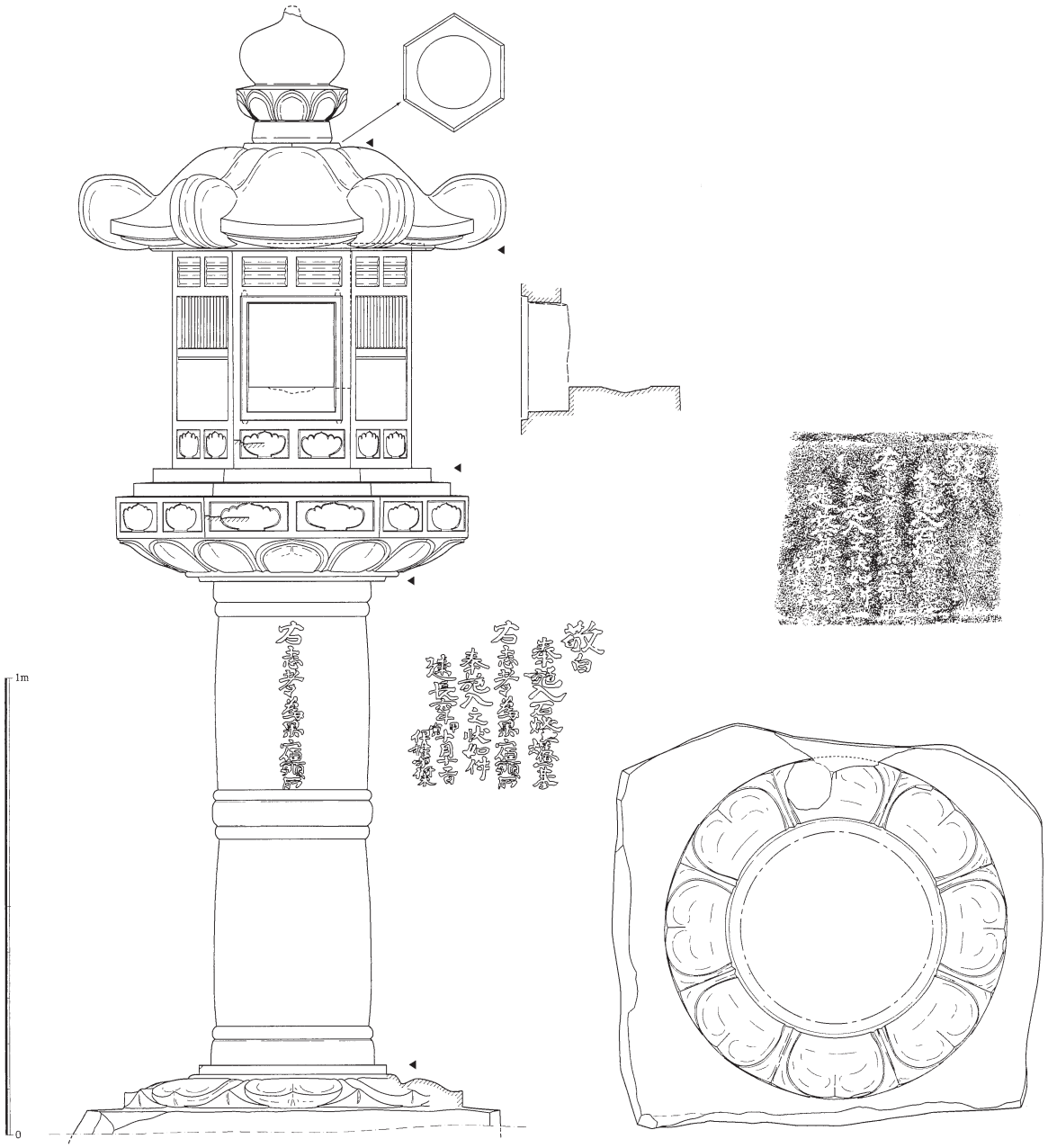


図１　東大寺法華堂前石燈籠実測図・拓影（1/15）

A　宝珠

B　笠部

C　火袋（火口面）

D　火袋（側面）

E　中台（下面蓮弁の様相）

F　基礎（反花座の様相）

写真２　東大寺法華堂前石燈籠各部

竿の上半部に大きく太目の文字で銘文が刻まれている。

敬白

奉施入石燈籠一基

右志者為果宿願所

奉施入之状如件

建長六年甲寅十月十二日

伊権守行末

とある。肉眼でもはっきりと読めるほど状態が良い。銘文の解釈については後述する。

中台　六角形を呈し、最大幅77.0cm、高さ24.6cm、側面の1辺は38.5cm前後、高さ9.1cmで、側面は上辺と下辺で若干長さが異なり、上方へわずかに開き気味に作られる。下面には12弁の単弁蓮華文をあしらうが、間弁は見えない。石材の関係からかやや風化が進んでいる。竿の受部は低く2段（各段高1.0cm前後）に作り、下径は40.2cm、上径は45.6cmを測り、蓮弁の基部につながる。側面は方形枠を2区設けて、中に格狭間を配する。文様の深さは0.5cmほどとかなり浅めである。上面は火袋の受部を2段に作り、いずれも六角形で対角の長さ64.0cm（下段）、60.7cm（上段）を測る。

火袋　六角形で対角長52.0cm（上下面共）、高さは見掛けで47.5cmを測るが、笠裏面の刳り込みが被さるため実高は49.0cmである。6面とも上中下の3区に分けられ、中区が大きく、そこに火口を正面と背面の各1面に設ける。下区は方形枠を2区画設け、それぞれに浅く格狭間を彫り込み、上区にはやはり方形枠を2区画設けて横方向の連子窓としている。火口は二重枠となるがその外側の高さが27.3cm、幅19.2cm、内側の枠は高さ24.0cm、幅18.6cmである。外枠から内枠までの深さは1.4cmで、外枠の上下各辺の左右に寄せて小穴が穿たれている。上下の小穴とも直径は1.2cm前後だが、上位の穴の深さは1.4cm程度に対して、下辺の穴は深さ0.5cmと浅めに作られている。これを扉の軸を差し込む軸擦穴と見ると、当初は観音開きの木製扉がセットされており、燈明の出し入れ時に開閉できる仕組みになっていた可能性がある。

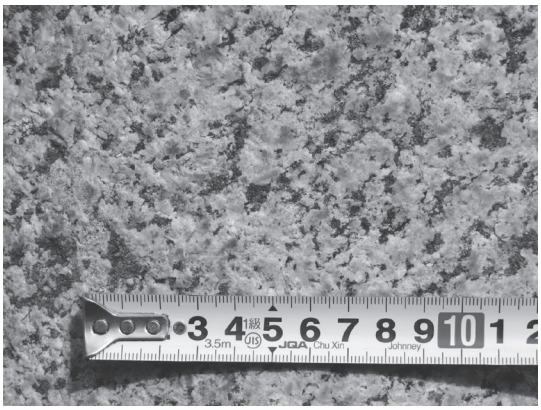
さて、火口の無い面はすべて同じデザインで、中区の上半部に縦方向の連子窓を表現し、下半は無地とする。上区は火口の面と同様に2区画の横方向の連子窓、下位も2区画の格狭間としている。この面の文様を参考にすると、火口に取り付けられた扉の意匠も類似のものだったかも知れない。あるいは扉とはせず、嵌め込み式の1枚の障子のようなものだったとすると、上半部に連子窓を取り付け、下半部に白紙を貼り付けたものだった可能性も考えられる。

火袋の内面は直径28.0cm程度に刳り抜かれ、天井部は吹抜けで笠の裏面が見えているが、内底面は火口下辺から5.4cmほど高くして火床を設け、中央に直径10.5cm、深さ1.2cmの浅い盆状の窪みを作って、燈明皿を置く施設としている。

笠　六角形で照起（テリムクリ）のある屋根に作り、最大長99.4cm、露盤を含めた高さは22.4cmでこのタイプの屋根ではかなり低めに作られている。各稜線は幅5cm前後の低い突帯で表現し、その延長端が巻き込むような形の蕨手となっている。そのため蕨手の正面観は中央がわずかに突帯状に膨らむものとなるが、側面は無地とし、高さ17.2cm、幅20.3cm前後を測る。軒口は緩い真反りとし、軒口の厚さ3.0cmを測る。軒裏面は火袋と重なる部分を六角形の突帯で囲み、1.5cm程度彫り下げて火袋上部と重なる。笠の上面は長辺が21.8～24.6cmで、高さ0.9cm余りの低い六角形の露盤を造り出している。

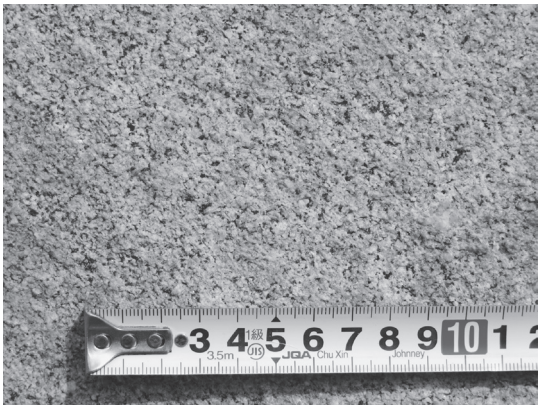
宝珠　総高は28.5cmで宝珠本体と受花、その軸部の3部分を一石で彫成している。屋根上面とは枘で接合されると思われるが未確認である。下位の軸部は直径16.2cm、高さ4.8cmで、上位でわずかに直径を小さくしている。その上に乗る受花は最大径24.1cm、高さ6.9cmで単弁の八弁で間弁は不明瞭ながら浅い稜線が見えるので、当初は彫り付けてあったものとみられる。宝珠は最大径22.8cm、高さ16.8cmで先端を

A　石燈籠基礎材

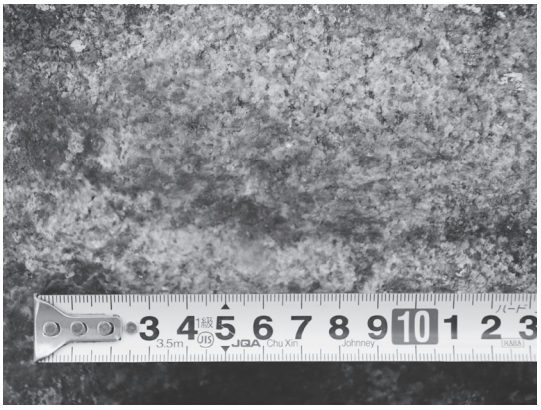


B　石燈籠竿材

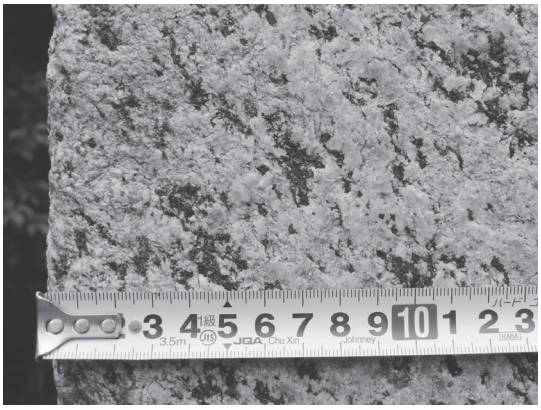
C　石燈籠中台材



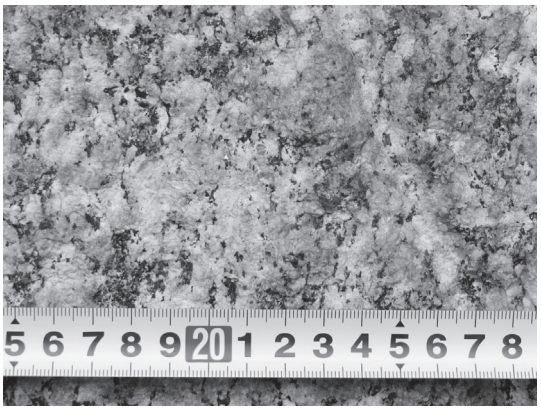
D　石燈籠火袋材



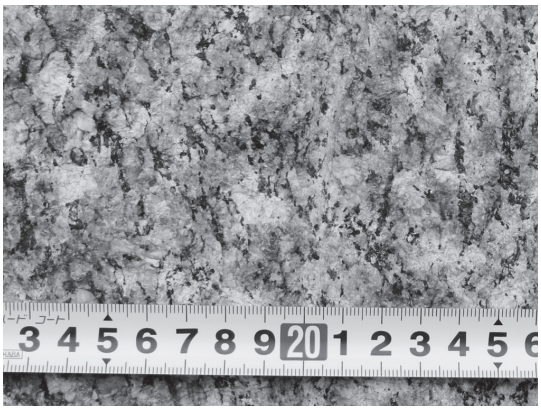
E　石燈籠笠材



F　般若寺層塔塔身材



G　般若寺笠塔婆北塔材



H　般若寺笠塔婆南塔材

写真３　東大寺石燈籠の石材と般若寺層塔・笠塔婆の石材

わずかに欠いているが、輪郭は綺麗な曲線を描いている。

２．石材観察所見

はじめにも少し触れたように本石燈籠は花崗岩を用いているが、部位によって種類が異なっている。この点について、寄せ集めではないかという疑問を挟む意見があったようだが、今回細部を細かく計測しながら観察した結果、数値や形の上で違和感を覚える部分は皆無であり、各部一具のもので良いと判断した。

竿と火袋は地衣類の付着も少なく詳細に観察できたが、基礎と笠、宝珠については地衣類に覆われており、多少タワシ等で除去を試みたが無理は避け、わずかに見えている面の観察に留めた。宝珠は地衣類によって石材の表面が見える部分がなかったので、観察を断念した。以下、各部石材について概要を記すが、岩石については明るくないので、細部の写真を提示するとともに簡単な解説を加えるにとどめる。

基礎の石材（写真3-A）　平滑な面での確認が出来なかった。黒雲母があまり目立たない種類の花崗岩と思われる。

竿の石材（写真3-B）　黒雲母が粒状や帯状に多く入り、ベージュ色を呈するカリ長石が多く含まれるため、石材全体が黄色味を帯びたように見えている。

火袋・中台の石材（写真3-C・D）　この2つの部位は同一の石材を用いていると判断できた。かなり肌理の細かな石材で、細粒化した黒雲母を多く含んでいる。カリ長石なども細粒化しているが、ベージュ系の色合いを見せている。

笠の石材（写真3-E）　観察できる面が小さいため不明瞭だが、黒雲母は細粒化したもので多く含まれ、カリ長石も細かめでベージュ系の色合いを見せる。火袋に近い石材かと思われるが、目視では火袋の石材より硬質に見える。

以上のような観察結果を得た。少なくとも3種類の石材を用いたものと判断される。しかし、その組合せに違和感のないことは先述のとおりであり、なぜこのような珍しい組合せで製作したのかについて検討し、まとめとしたい。

３．まとめ―なぜ異なる石材を組み合わせたのか？

1基の石燈籠造営に対して数種類の石材で組合せることを選択したのは、伊行末の意図的な行為と考え、いくつかの点で検討し、その背景を探ってみたい。

まず銘文を解釈することから始める。現代語訳風にすると「敬って申し上げます。石燈籠一基を施入（作成してお納め）奉ります。その志は（私が）宿願を果たしたためであります。施入の状のとおりに奉りました。建長六年（1254）甲寅十月十二日　伊権守行末」と読める。伊行末が石燈籠を製作し、行末自身が施主となって東大寺に奉納したことが分かる。施主と製作者が同一という珍しい事例と言える。注意したいのは、これに伴って施入状を作成し東大寺に奉納しているように読み取れることである。そこには他の供養目録に見るような、自身の作善業一覧（造営した石造物一覧）が掲載されていたかも知れないし、この石燈籠造立の趣旨をすべて理解することができた可能性もある。しかし、残念ながら今それが叶わないため、いくつかの視点から奉納背景について推測することでまとめに代えたいと思う。

類似の石材　少なくとも3種類の石材を用いていることは確実とみられるが、それらとよく似た石材が伊行末及びその嫡男行吉の作品中にみることができる。まず行末の作品として般若寺十三重石塔をあげることができる。含まれている黒雲母が細粒化し、一部では短い帯状を呈している。カリ長石は若干黄色味

を帯びているようにみえる（写真3-F）。これと同じ石材は、行吉の作品となる般若寺笠塔婆北塔のものに似ている。石燈籠との関係では竿石に近いものの、それよりやや黒雲母は小さめに見える。石燈籠基礎の石材に似るのかも知れない。これに対して笠塔婆南塔の石材は、黒雲母の粒も大きく、帯状になって多く含まれ、カリ長石もベージュ色を呈している点で、石燈籠の竿石と一致するものである。火袋等の石材は未確認であるが、伊行末に所縁ある石材を各部位に利用していることが窺える。

以上の点を踏まえると、伊派の工房に残材として残っていたものを組み合わせて使用したと推測することもできるが、はたして自身の工房に大きな残材を常に保有していたのであろうか。この点について記録した史料は残っていないが、現存する石塔部材の切り出し方に着目すると小さなヒントが得られる。近年調査が進んでいる矢穴の残存状況に着目しつつ、東大寺石燈籠と年代の近い資料を眺めてみると、大和郡山市額安寺宝篋印塔（文応元年／1260）では基礎石側面に数個の矢穴が残されている（狭川2011）。高取町観音院（弘長三年／1263）でも基礎下面に数個の矢穴が確認され、紀年銘は無いが近似する造立年代の奈良市須川神宮寺宝篋印塔では、笠部隅飾りの側面に矢穴の痕跡が見つかっている（狭川2020）。また、京都府木津川市東小会所前の阿弥陀坐像石仏（弘長二年／1262）の背面にも矢穴が確認できる。

これらを石材切り出し時の矢穴とすると、各部位を製作するにあたり必要な石材はほぼギリギリのサイズに切り出し、加工を施してゆくと推定できる。つまり石材表面の調整に伴う小破材は多数出るとみられるが、大きく切り離された石材は工房には存在しないのではないかと推測することができる。このように考えると石工の工房に多くの石材が保有されているのではなく、必要時に必要なサイズで切り出して運び込んでいるものと考えられ、残材の利用という観点は遠ざけておきたいと思う。

石材の適材適所　東大寺石燈籠に使用された石材を観察すると、特に強度が必要と推定される竿の材には硬質の石材を用い、細かな細工が必要な中台や火袋にはきめ細かな石材を利用するという、その特性を踏まえた選択を行っているのではないかという想定ができる。これは他に比較する事例を見つけられないので想像の範囲となるが、基礎石にも蓮台を彫刻しているものの火袋よりも硬質の石材を利用しているとみられ、すべての加重を引き受ける部位だけに、強度を優先したものと考えることもできよう。

このように適材適所に石材を使い分けることは、通常の石塔造営ではみられない行為であるが、この石燈籠の場合は伊行末の宿願が集約された作品でもあり、後進に適材適所における石材利用の見本として提示する意味もあったのではないかと思う。

伊行末の宿願　前記したように施主と製作者が同一であるという珍しい事例だが、そこには製作者たる伊行末の想いが凝縮しているものと思われる。それは銘文の中心にみえる「為果宿願所」に示されていよう。その「宿願」とは何だったのか。山川均は若干の検討を加えて「宿願」は十分に叶えられたとみている（山川2014）。筆者も同意見だが、上記したような異種の石材利用やその組合せによる造立、奉納先が東大寺であるということなどを踏まえて、筆者なりに想像を膨らませてみたい。

伊行末は、般若寺笠塔婆銘に「宋人行末者異朝明州住人也」とあって、中国寧波の出身である。来日後は大仏殿の石壇四面回廊諸堂垣が荒れていたのを修復する事業に参画したようである。さらに延応二年（1240）に宇陀市大蔵寺十三重石塔、建長五年（1253）には般若寺十三重石塔を建立し、その翌年（1254）に東大寺石燈籠を造営・奉納したのち、正元二年（1260）に他界したようである。伊行末の来日年月は定かでないが、重源による東大寺復興を記載した『東大寺造立供養記』によると、「宋人六郎等四人」が来日したのが建久七年（1196）であり、そこに伊行末も含まれていたと考えるのが一般的である。そうすると、およそ65年の長きにわたり日本の地で活躍し、生涯を終えたことがわかる。伊行末の享年は不明であるが、仮に80歳とした場合は、弱冠15歳の若き日に来日したこととなる。おそらく20歳前後までには渡来していたのは確実とみられ、日本で妻帯し、子息を儲けることとなったのであろう。このような伊行末個

人の歴史を思うと、その「宿願」は、異国の地・日本で石工として権守にまで昇進し、東大寺の数々の堂舎の修築に参画し復興を下支えするとともに、自身の作品も各地に残すことができた。さらに嫡男も立派な石工として成長し、行末の集大成とも言える石燈籠を想いの詰まった東大寺に奉納することを許された。満足のゆく生涯であったことへの感謝の意が込められた造立と言えるのではないだろうか。

文末になりましたが実測調査を行うにあたり、森本公譲師、田中泉氏をはじめ東大寺の関係の方々、京都府立大学の横内裕人氏にお世話になりました。また実測作業の補助には、本田洋氏(多賀町教育委員会)、池田千尋氏（本学学芸員)、田中稔氏（本学大学院生）にお手伝いいただき、実測図の浄書は芝幹氏（元興寺文化財研究所）にお願いした。ここに記して感謝申し上げます。

なお、調査に際して採取した拓本一式は、東大寺様へ納めさせていただいた。

【参考文献】

天沼俊一1933『石燈籠　総論・年表』スズカケ出版部
天沼俊一1913『奈良縣史蹟勝地調査會報告書 第１回』奈良縣（1977年大和文化財保存会から復刊）
川勝政太郎1939『石造美術』一條書房（1981年に新版として誠文堂新光社から発行）
川勝政太郎1978『日本石造美術辞典』東京堂出版
清水俊明1984『奈良県史第七巻 石造美術』名著出版
西本昌司2020『観察を楽しむ 特徴がわかる 岩石図鑑』ナツメ社
山川均2006『石造物が語る中世職能集団』山川出版社
山川均2014『供養をかたちに―歴史的石造物を訪ねて』（『月刊石材』別冊シリーズ）石文社
狭川真一2011「額安寺宝篋印塔実測所見」『額安寺宝篋印塔解体修理報告書』大和郡山市教育委員会
狭川真一2020「須川町神宮寺宝篋印塔実測記」『元興寺文化財研究所研究報告2020』公益財団法人元興寺文化財研究所